

デジタル・ビジネスモデル研究所の使命

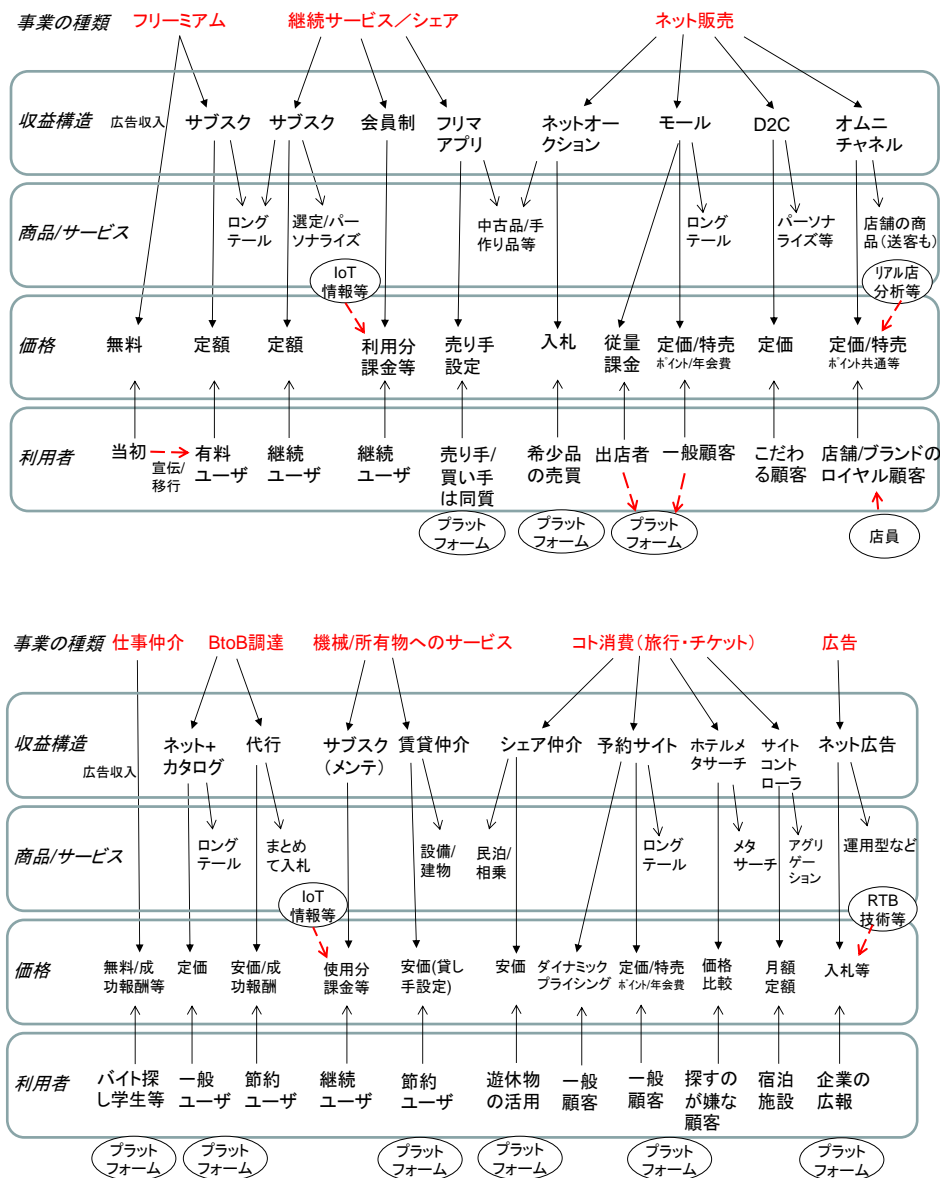
2020/5/12 デジタル・ビジネスモデル研究所 代表 幡鎌 博

この資料では、弊社を設立した狙いをご説明します。

代表の幡鎌が大学で研究してまいりましたビジネスモデルの構造化等の手法を、DX（デジタルトランスフォーメーション）検討時の新事業・新サービスの設計・発想のご支援に活用することを使命と考え、起業いたしました。

DXでは、攻めの姿勢が重要です。単に情報システムを作り替えて効率化するだけの守りの姿勢よりも、DXを契機として新事業・新サービスまでも視野に入れた検討が望まれます。企業変革してビジネスチャンスを見つける位の姿勢でないと、新たなデジタル化の効果を最大化できないためです。新事業・新サービスを検討する際には、ビジネスモデルをどう構築するかを考える必要があります。弊社では、独自の метод論でそのためのご支援をいたします。

以下の図は既存の事業の主なビジネスモデルを構造化した例です。これまでビジネスモデルの手法と言われている方法は、互いに関係し合っていることが多いことが分かります。



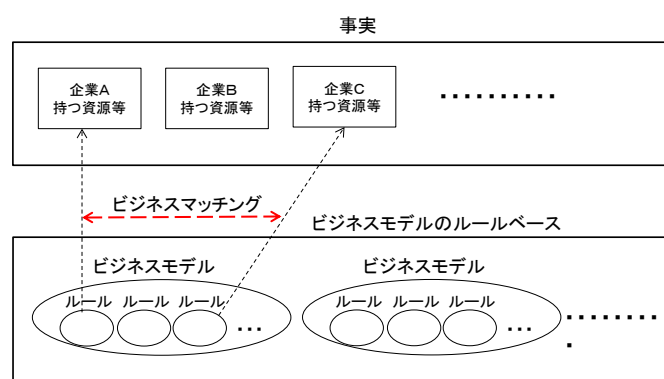
このような構造化の視点から、望ましいビジネスモデルの発想や構築をご支援いたします。様々な組み合わせを検討できるため、発想する上で有効な手法と考えております。また、プラットフォーム設計の際には、ビジネスモデルキャンバス仲介版という独自のツールを用いて、プラットフォームの仲介機能や収益・コストなどの検討をご支援いたします。企業改革の面では、内閣府知的財産戦略本部が提唱している経営デザインシートを活用して長期的なビジョンを描くためのご支援をいたします。

弊社のビジネスモデル構造化手法は、ビジネスモデルをA Iでモデリングする研究に基づいています。A Iのルールベースと呼ばれる方式で、ビジネスモデルの要素間の因果関係を説明するモデリングを行うことで、ビジネスモデルをより明確に表現できます。A I言語のPrologでビジネスモデルを表現した例などの詳細は、「人工知能アプローチによるビジネスモデル分析・設計の可能性」(経営情報学会大会、2018/10、https://www.jstage.jst.go.jp/article/jasmin/2018t10/0/2018t10_45/_article/-char/ja/)をご覧ください。そのような研究から、ビジネスモデルを分解して構造化できることが分かりました。

弊社は、そのような研究を発展させて、DXでの新事業・新サービスの設計・発想の際のビジネスモデル面のご支援だけでなく、将来的には以下のようなビジネスマッチングのような課題にも取り組んでゆきたいと考えております。ビジネスモデル自体を「デジタル化」することで、人間が発想する以上のチャンス発見ができ、ビジネス創造に貢献できる可能性があると考えております。この構想についても学会発表しております。「AIによるビジネスモデルのモデリングと活用」(電子情報通信学会 SWIM 研究専門委員会, 2020年2月)

弊社が構想するビジネスマッチングの仕組み

持つ資源からマッチングするなど。



ビジネスモデルが成立するかの探索を含めることで、新規事業の創造につながるマッチングも可能。

また、幡鎌が大学教員時代から更新しております事例集・リンク集・ニュースというような情報発信も(ビジネスモデル特許の調査を含めて)続けてゆく予定です。可能であれば、テキストの改版も続けたいと考えます。お役にたてば幸いです。